

## 第10章 総括

本研究では、スンバワ語の全体像について明らかにする試みを行った。

第1章ではスンバワ語をとりまく状況を明らかにするとともに、スンバワ語に関する先行研究、本研究の基盤となった調査について述べた。第2章、第3章では以降の章の導入としてそれぞれ音韻の概略、文法の概略を示した。第4章では形態論を、第5章では文の構造を扱った。また、第6章では述部の構成要素、第7章では叙法辞の機能を、第8章では複文の構造を扱った。さらに、第9章では指示詞の意味、機能を扱った。

以上の内容をふまえ、以下の部分では、スンバワ語の特徴について、おおまかに述べる。

スンバワ語の形態論に関する特徴として、語形成のプロセスが単純であるという点が挙げられる。文中に現れる単語のほとんどが語根そのままの形で現れ、接辞を含む場合も、ほとんどの場合語根一つに対して接辞が一つしか現れない。語形成にかかわる接辞の種類も少なく、ある程度規則的な語形成を行うものとして確認されているのは、6つである。(語形成にかかわるものに限らず一般に)形態論が単純であることは、近隣の同系統の言語である西部インドネシア諸語(マレー語やバリ語など)の多くに共通してみられる特徴であるが、その中でもスンバワ語の語形成にかかわる接辞の少なさは顕著である。

ただし、いわゆる「屈折的」プロセス、中でも動詞を主要部とする述部の形成にかんしては、(少なくとも近隣の同系統の言語と比べた限りでは)スンバワ語はそれほど単純ではない。スンバワ語では、アスペクト、モダルを表す要素はいずれも独立度の低い形で(アスペクト辞、モダル辞、叙法辞として)現れ、述部の一部となる。また、アスペクト辞、モダル辞、叙法辞は、互いに、あるいは否定詞 *nó* と結びついて複合形を形成し、アスペクト、モダルにかかわる様々な内容を表し分ける。(近隣の同系統の言語においてはスンバワ語の否定辞、アスペクト辞、叙法辞に意味的に対応する要素の多くは独立度の高い、動詞と形態的に切り離すことのできる形式として現れる。また、スンバワ語のように複合形を形成することはない。)

スンバワ語の統語論に関する特徴として、他動詞を述部の主要部とする文における「態」の対立がないことが挙げられる。この言語では自動詞の他動詞化、他動詞の自動詞化は観察されるが(第4章の2.3を参照されたい)他動詞文におけるいわゆる態の転換は観察されない。スンバワ語は比較的補語の語順が自由な言語で、多くの言語で態の転換によって表し分けられている意味的・談話的対立が、この言語では語順によってある程度表し分けられているようである。この「態」のシステムの違いは、上記の形態的特徴と並んでスンバワ語が近隣の同系統の言語と大きく異なる点の一つである。この点については、この章の後に付した補遺でやや詳しく扱う。